

Thinking and Being in Parmenides

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-04-08
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Miura, Kaname
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065797

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



パルメニデスにおける「思考」と「有ること」について

三浦 要

はじめに

エレアのパルメニデスによれば、「死すべき者たち」つまりは先行する自然哲学者たちは、その思考の基盤から無を排除しようとしながらも、同時にそこに生成消滅や変化を加えることで「思わく」(δόξα)を形成している。彼らの「思わく」においては、「生成する」「消滅する」「変化する」ということが「有る」ということと同じ資格で並び、同一の対象が生成し、有り、消滅するとされる。例えば、始源(アルケー)としての空気が濃密化というメカニズムによって水に変化し、希薄化により火に変化するということは、当の空気が、その変化以前にはなかったはずの水あるいは火の生成と同時に有らぬものとなるということである。そこでは「有るもの」と「有らぬもの」の相互転換が自明のこととして語られ、また、始源の存在の根拠そのものが問われることもない。

彼らの自然哲学における本来的な論理的欠陥としてのこの「有る」と「有らぬ」の混同は、言うまでもなく「有る」ということの本性の無理解に起因する。「有る」のであれば絶対的に「有る」のでなければならず、「有った」も「有るだろう」も許容されえない。「有るもの」とは、不生不滅、連続不可分割であり、また、不動にして完結しているものなのである。探究の対象として何を指定するにしても、まず、この実在の本性規定を満たすものでなければならない。

それまでの自然哲学が実現してきたすべてに脅威を及ぼし、自然哲学の根本的な転換を促すパルメニデスの論理的要請——それは宇宙論自体を不可能にしかねない——に対して、どのように応答すべきか。エレア派以後の世代の哲学者たちが提示した対応策はさまざまであるが、基本線において共通する部分をもっている。つまり、彼らは、パルメニデスによる生成と消滅の排除に同意したが、他方、変化についてはこれを端的に排除するのではなく、実在の生成消滅に関わりをもたないような変化の可能性を追求し、同様にして、運動ということも、これが現象の本質であるように思われる限りで、エレア派の実在規定に反して認めた。そして、運動や変化に関してエレア派の論理に対抗しうものとしてさらに精緻な理論化が求められる中で、ミレトス派では等閑にされていた原因の問題にも敏感に反応し、整合的な説明に努めた。要するに、パルメニデス以後の自然哲学が実際にとった展開の方向が首肯可能なものとなるのも、また、パルメニデスによる自然学説批判が的を射たものとなるのも、パルメニデス以前の自然学説が物質的要素の単なる性質変化でなく

いわば実体的変化、すなわち物質的要素の生成と消滅を含意する変化を基礎としていたからである。

ところで、パルメニデスの独自性が「有る」の本性をめぐる形而上学的思索において發揮されていることは言うまでもないが、そこでは、上述の通り、不生不滅、連続不可分割、不動、完結という「有ること（もの）」についての内的規定を与えるのに加えて、「認識すること」、「思考すること」、「語ること」と「有ること」との有機的で密接な関連付けが行われている。その端的な例が「断片」3 [DK28B3]¹である。

τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστίν τε καὶ εἶναι.

暫定的な訳を与えておくと、「思考することと有ことは同じである」となる。このいわば認識論的かつ形而上学的な規定は、解釈の仕方によってはパルメニデスに極端な観念論や非合理的な神秘論を帰することになりうるものである。本稿の目的は、「断片」3を中心に、パルメニデスにおける思考（思惟）、認識、言説とその対象である「有ること」との関係について考察し、認識に関わる見解の特徴と限界がどこにあるかを見定めることにある。

1.

まずは、思考や認知を表す代表的な動詞で、パルメニデスにおいて同語源の語も含め多用されている「*νοεῖν*」について、その意味を確認することからはじめよう。パルメニデスでは、これが「*think*」ではなく「*know*」を意味するものであると主張する研究者は多い。例えば Mourelatos は、この動詞「*νοεῖν*」が示している機能は、ホメロス以来、考察対象の可視的な表層の下にある真の本質を見抜くという直観的機能を有していて、それはパルメニデスに至っても同様であり、その中心的な機能は、論証的（discursive）・推論的（ratiocinative）なものではなく、直観的（intuitive）なもので、つまり、この動詞は、「思考する」（to think）ではなく「知る」（to know）、「理解する」（to apprehend）、「把握する」（to comprehend）、「理解するようになる」（to come to understand）、「～の素性を十分に認識する」（to realize fully the identity of）といった意味を表すと主張する。Kahn もやはり、それは「思考」という漠然とした心理的概念ではなく、人の正体やある状況における諸々の事実とその本当の意味を「看取」し（noticing observing）、「認識」し（realizing）、「洞察」する（gaining insight）という意味であると解する。

また、Guthrie も、人間の認識能力には、対象や状況の本性を直接的に把握する力——それはちょうど感覚による表面的な諸性質の直接的把握に似ているが、ただしそれよりももっと深い力——が含まれているとする一般的な古代ギリシア人の信念を認めて、パルメニデスが「有るもの」との関係において「*νόος*」の機能として念頭においているのもそうし

た力であるとみる²。

このように、「voεiv」に直観的な洞察という機能を認めることの背景には、ホメロス以来の認識能力に関する古代ギリシアの人々の共通の信念があったとする史的理解があるが、それに加えて、プラトンという権威がパルメニデスにおける「voεiv」をまさにそのように理解していたという事実がある³。たしかにプラトンは、例えば『ソピステス』において、「有らぬもの」をめぐる言説が内包する本質的な問題をエレアからの客人に語らせるなかで、パルメニデスの詩行の、

「なぜなら、有らぬものどもが有るというこのことが罰らされることはけっしてない
だろうから。むしろあなたは、探究のこの道からあなたの考えを遠ざけなさい。⁴
(οὐ γὰρ μήποτε τοῦτο δαμῆ εἶναι μὴ ἔόντα· ἀλλὰ σὺ τῆσδ' ἀφ' ὁδοῦ διζήσιος εἰργε
νόμενα : 「断片」 7.1-2)

という勧告を二度にわたり引用し (237A, 258D), 「有らぬものをそれ自体として単独に正しく口に出すことも語ることも考えることもできないのであり、むしろそれは、思考されえないもの、ことばで表現されえないもの、口に出されえないもの、論じえないものである」 (238C) と確認している。明らかにこれは、

「というのも、あなたは有らぬということ [有らぬもの] を知ることはできないであ
ろうし (それは実現されえないことゆえ)、またそれを指し示すこともできないであ
ろうから。」 (οὔτε γὰρ ἂν γνοίης τό γε ἔόν (οὐ γὰρ ἀνυστόν), / οὔτε φράσαις :
「断片」 2.7-8a)

というパルメニデスのことばを踏まえたものであろう⁵。

そして、プラトンの「νόος」の理解に関してもパルメニデスの明らかな影響を認めることができる箇所としてしばしば挙げられるのが、プラトン『国家』第5巻での真の哲学者とそうでない者との精神のあり方の違いをめぐる議論である。特に475E-477Bでの「知識」と「思わく」の区別の前提となる議論が、パルメニデスの「断片」8における「有るもの」の本性規定の前提となる部分、すなわち「断片」2, 3, 6と構造的に対応しており、Palmerによれば、プラトンは、パルメニデスの「νόος」とその同語源の語が、限定的なあり方を有するもの (要するに、「断片」8でその本性が規定される「有るもの」) を対象とする強力な形態の理解力を意味するものと解していたであろう、と推測されている⁶。そして、プラトンがパルメニデスの「νόος」を、「有るもの」に限定されない任意の対象に向けられる一般的認識能力と考えていたはずがないと見ることのできる理由が、476Bから478Dにかけての議論における«διάνοια» (「精神のあり方」), «γνώμη / γνώσις / ἐπιστήμη» (「知識」), «δόξα» (「思わく」) という認識に関わる語の特徴的な使い分けである。

じっさい、登場人物のソクラテスによれば、視覚や聴覚を愛好する者たちの精神のあり方は、「思わくしているにすぎない」ので、「思わく」と呼ばれ、他方、事物の本性を窺う能力をもつ人々（＝真の哲学者）の精神のあり方は、「本当に知っている」以上、「知識」と呼ばれるのが正しいとされる。そして、「知識」と呼ばれているものは、本性上、「完全に有るもの」を、「無知」は「まったく有らぬもの」を対象とするのに対して、「思わく」はこれらの中間である「有りかつ有らぬもの」を対象とする、ということが確認される。Palmer が指摘するように、「知識」を意味する «γνώσις» は直ちに «ἐπιστήμη» と言い換えられるが、これらの語が中間的な対象について用いられることはない。そして、日常的経験の対象に関わるものではありえない「知識」こそは、パルメニデスにおける«νόος» に相当するものであり、「思わく」はそのままパルメニデスにおける「死すべき者たちの思わく」（βορῶν δόξα：「断片」1.30）に相当するということになる。実のところ、パルメニデスによれば、「有る」「有らぬ」の認識に関してかれらは以下のようなありさまなのである。

「彼らは耳も聞こえなければ目も見えず、呆然として判別する力のない群衆となって引き立てられる。彼らによって「有る」と「有らぬ」は同じであり、かつ同じでないと思なされている。」（οἷς τὸ πέλειν τε καὶ οὐκ εἶναι ταῦτ' ὁ νομίζεται / καὶ ταῦτόν·：「断片」6.8-9a）

かくして、パルメニデスの哲学詩からの直接引用があるわけでも、名前が言及されているわけでもないが、『国家』のこの箇所の論述へのパルメニデスの影響は明白である。その上で Palmer は、この箇所の認識論が、プラトンの観点から解釈された限りでのパルメニデスの認識に関わる見解を枠組みとしたものであることだけでなく、さらに踏み込んで、プラトンのパルメニデス解釈は妥当であって、彼の «νόος» がプラトンの理解するようにじっさいにもつばら「有るもの」をその固有の対象とする能力であると主張する。

つまり、ホメロスですでに、「何かについてそれが本当は何であるか」の認識を表すのに «νοεῖν» と «γινώσκειν» という動詞（そして同語源の語）が重なり合いつつ用いられているケースがあったが、ソクラテス以前哲学者においては、後者が事物の「何であるか」の認識を、前者が実在についての深い理解を表すようになり、例えばヘラクレイトスでは «νόος» の対象がロゴスという彼にとっての普遍的真理であるのに対して、「γνώσις» の対象は必ずしもそうではなく、同様に、パルメニデスにおいても «γνώμη» がものの本性の認識を表しはするが、有るものへと必ずしも向けられるわけではない一方で、「νόος» は絶対的有り方を有するものをその対象とするとされている、と Palmer は見なすのである⁷。つまり、パルメニデスにおいては、「νόος» の意味が、「何かについてそれが本当は何であるか」の認識から、「何が本当にあるのか」の認識へとシフトしていることになる。以上のような意味の展開を考慮したとき、プラトンがパルメニデスの «νόος» を彼自身

の「γνώσις/ἐπιστήμη」でもって明確化したことは正当なことだったと評価されることになる。

しかし、「νόος」と「γνώσις」、そして同語源の語について、プラトンが以上のようにしてパルメニデスを解釈していたとすると、それはやはり妥当とは言いがたいと思われる。そもそも、ホメロスにおいて、「γνώσις」が対象を特定のものとして認識することであるのに対して、「νόος」が対象のもつ意味のより複雑な理解を含意する点で区別されるという Palmer の主張は一般性をもたず、ソクラテス以前哲学者においても使い分けの傾向を認めることは困難なのである。そこで、パルメニデスにおいて、「νόος」、「νοεῖν」が論証的ではなく直観的な認識や理解を意味していると解釈することはできないのか、できないならその本当の内実はいかなるものなのか、パルメニデス自身のことばに立ち返って考察する必要がある。

2.

手始めに検討したいのは次の断片である。

αἴτερ' ὁδοὶ μοῦναι δεζήσιός εἰσι νοῆσαι. : 「断片」 2.2

Cf. πόρος ἐστὶ νοῆσαι. : エンペドクレス 「断片」 3.12

おそらくパルメニデスの詩を知っていたであろうエンペドクレスが、それを意識していると思われることば（「思考 [あるいは認識] することのために道がある」）がエンペドクレス「断片」3.12であるが、そこでの不定詞「νοῆσαι」（「νοεῖν」のアオリスト能動相不定詞）は明らかに、結果あるいは目的を表すことで定動詞「ἐστὶ」の意味を補完する、不定詞の最も古い用法である与格用法の動詞的名詞⁹（*dative verbal noun*）であることから、「断片」2.2の不定詞も同様の用法を認めることができよう（実は、この動詞的名詞の与格用法が「断片」3の解釈に大きく関わってくるのだが、今はとにかく「断片」2.2に集中しよう）。その場合、「断片」2.2は、「思考するために（の）いかなる探究の道のみが有るか」という意味になる。不定詞をこのように与格用法と解すると、定動詞が完全自動詞であるために、結局、この断片では、思考のために有る探究の道とはどのようなものかが問われており、道の存在が際立ったものとなっている。そこで、「断片」8.16b-18を見てみると、

「ところでじつさいに、必然のこととして、一方の道 [「有らぬ」の道] は考えられず名を呼ぶこともできないものとして棄ておき（…）、もう一方の道 [「有る」の道] は有り、真正のものであるということがすでに決せられていた。」（κέκριται δ' οὖν, ὥσπερ ἀνάγκη, / τὴν μὲν ἑὴν ἀνόητον ἀνώνυμον, (...) , τὴν δ' ὥστε πέλειν καὶ ἐπῆτυμον εἶναι.)

と言われている。いま「断片」2では思考のために存在する探究の道が女神（パルメニデス）から真理探究者に対して問われていたが、このすぐあとに「有る」と「有らぬ」の道が女神自身により提示され、しかもそれらは提示と同時に、前者については真理に従う説得の道としてそのまま採択され、後者については探し求めることのできない道として廃棄される。その意味で、「断片」2と8とは道の存在をめぐって適切に対応しているということになる。

そこでまず問題となるのは、不定詞 «νοῆσαι»（思考する）の対象が何であるかという点である¹⁰。目的用法の与格不定詞が他動詞の場合にはその目的語は定動詞の主語から理解されるのであり、そうすると、この不定詞が補語として付加されている定動詞の主語である「道」が思考の対象となる（つまり「思考すべく有る道」）が、そうでない場合は、明示されていないが何らかの探究対象が想定される（つまり「何かを思考するために有る道」）。前者の場合には、受動態への言い換えが容易になされることになるが（つまり「思考される道」）、Mourelatosはその解釈を拒絶して、道自体が思考の対象であるということはいかなる意味においても含意されていないとする¹¹。その場合、不定詞は目的用法であるからには、単に漠然とした一般的な意味での「考えること（あるいは認識すること）」という行為を意味するだけとなり、女神の問いかけはきわめて陳腐なものになってしまうだろう。行為そのものが目標となるように重み付けが必要となるのであり、Mourelatosが、あらゆる思考の対象として「有るもの（ὄν）」を想定しているのもそのためであろう。Robbianoも«νοῆσαι」が単なる思考以上の、「有るもの（こと）」の直接的理解（direct understanding of Being）であるという意味で、探究の道はこの理解をゴールとしている、とする¹²。

しかし、パルメニデスの詩を聴く（読む）者は、はたしてこの一つの動詞に、明示されていないそうした特有の目的語を聴き取る（読み取る）ことができるのだろうか。また、「道」を«νοῆσαι」の対象と見ることをMourelatosは強く否定するが、「道」の内実は「有る」と「有らぬ」に他ならないのであって、女神は真理探究者に向かってその両方について「有る」は有るし、「有らぬ」は有らぬと語り考えるよう勧告している（「断片」6）。無論、「有らぬ」ということは知ることができないという理由で、「有らぬ」（の道）そのものが探究者の思考（理解）の対象となることは最初から排除されている。それについて思考し語ることができるのは、真理探究の起（基）点として「有るか有らぬか」という排他的選言を定立する女神のみであり、「有らぬ」に関する限り探究者に許容されているのは、この思考の原則に従ってあくまでも「有らぬ」は有らぬ」というトートロジーを熟考することだけである。「思考すべくあるただ二つの道」の一つが実は「あなたが知ることのできない（οὐτε ἄν γινώγῃς）道」であれば、思考できないものが思考の対象となっていて、それは矛盾しているのではないかという反論があるだろうが、探究の道という原理的な選言を構成する二項を立て、その二つの道を思考するのは女神以外にはいない。要するに«νοῆσαι」の主語はMourelatosが想定するような«you», «men», «mortals」のいずれ

でもない以上、矛盾は生じないのである¹³。

だが、まだ検討すべき解釈が残っていた。つまり、先に確認した受動態への変換の問題である。「思考するために (の) いかなる探究の道のみが有るか」は、必然性もないままに「いかなる探究の道のみが思考されるか」という受動表現へと換言される¹⁴。このことで問題となるのは、際立っていたはずの探究の道の「存在」自体が消し去られることである。原語では定動詞の «ἐστίν» が厳に存しているにもかかわらず、翻訳のレベルでこのような解釈を施すことで、不定詞の意味上の主語が解釈の背景へと退き、「思考 (理解)」に力点がおかれることになる。そしてこれは、«voeiv», «vóos» に対する認知能力の評価にそのままつながることになる。

そして、さらに問題だと思われるのが、この受動表現に可能の様相をもたせて、「いかなる探究の道のみが考えられうるか」といった訳を施すことである¹⁵。定動詞が完全自動詞である以上、たとえ不定詞が補語となっても可能の意味をもたせることは困難である。そして問題は文法的なものにとどまらない。可能の様相の導入により、何が探究の道であるかは思考可能性にかかっていることになるが、ひとが考えられる限りのあらゆるものが探究の道となるわけでないとする、当然 «vóos» の側に深遠なる明察力が必要となろう。普遍的な思考の原則に関わる事柄であり、しかも主体を探究者 (あるいは死すべき者たち) とみるならばなおさらである。しかし、パルメニデスはその詩のどこにおいても «vóos» にそのような力を認めてはいない。「断片」8.34-36a では次のように言われている¹⁶。

「思考することと、思考がそのゆえに有るところのものとは同じである。なぜなら、思考がそこにおいて表現を得るところの有るものがなければ、あなたは思考することを見出さないだろうから。」(ταὐτὸν δ' ἐστὶ νοεῖν τε καὶ οὐνεκεν ἔστι νόημα / οὐ γὰρ ἀνευ τοῦ ἔοντος, ἐν ᾧ πεφασμένον ἔστιν, / εὐρήσεις τὸ νοεῖν·)

この詩行の訳をめぐっても様々な議論があり、すでに他のところで論じているので詳細には立ち入らないが、思考の内容が「有ること (もの)」に限定されて初めて思考行為は本来の目的を達成し、その思惟内容を語るときに言説もその真なるものとなる。思考と言説が成立するかどうかは、それらが対象としての「有る」に向かいこれを内実にできるかにかかっている。結局、「有ること (もの)」が「本来的思考と言説」の原因とされているのであり、「有る」が「真なる思考と言説」の必要条件とされていると言ってよいだろう。

3.

ようやく「断片」3 を検討するところまで来た。この断片についてはコンテキストも不明確であり、様々な解釈が提起されてきているが、有力な読み方を二つ取り上げて、解釈上の問題点を指摘しつつ、可能な限り妥当な解釈を与え、この断片がパルメニデスの哲学の中でどのような意味をもっているのかを考える。

最初の読み方は、「τὸ αὐτὸ」を主語、二つの不定詞を補語、述語動詞を«ἐστίν»とするものである。構文をこのように解した上で、例えば Gallop は次のような英語訳を施しているが、この解釈を取る場合の標準的な訳であると言える。

... because the same thing is there for thinking and for being.¹⁷

...τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστίν τε καὶ εἶναι.

すなわち、「同じものが思考することと有ることのために有る」となる。このときの不定詞は、すでに見た与格用法の動詞的名詞 (dative verbal noun) ということになる¹⁸。この読みは、Zeller 以来、現在にいたるまで非常に多くの研究者たちの支持を得ており、もはやスタンダードな解釈と言ってよい¹⁹。ではこの読み方にはどのような問題があるか、簡単に見ておこう。

まず気付かれるのは、「断片」2.2 と同様に、「思考すること」と「有ること」という二つの不定詞が目的の与格であると理解されており、ここでは文の主語である「同じもの」が、「思考すること」の意味上の目的語であるとともに、「有ること」の主語になっているという点である²⁰。この不均衡は文法的に不可能というわけではないが、やはり構文としてはわずらわしいものであるため、これを解消しようとする研究者は、先に「断片」2.2 で見られたとおり、「同じもの」が二つの不定詞の意味上の主語となるように、「思考すること」のほうを受動態に訳し変える。例えば、O'Brien は次のように訳している。

... for there is the same thing for being thought and for being²¹.

イオニア方言では早い段階で、受動態の不定詞が成立していたのであり²²、ギリシア語で能動態が用いられているのに、そこに受動の意味を読み込むことがはたして妥当なのだろうか。元々の文の細かいニュアンスを損なうことになりかねないだろう。また、「目的」という概念がもちこまれたがゆえに、この文は、「同じものが考えられるために有るとともに、有るために有る」とか「考えられるために有るものと、有るために有るものが同じ」という、それ自体解釈がきわめて難しい主張となっている。仮に「同じもの」を何であれ探究の対象であるとする、それが有るために有るとはどういうことなのか。また、これが「思考の対象は何であれ有る」という主張に敷衍されうのなら、パルメニデスを観念論に限りなく接近させることになるが、言うまでもなく、キマイラやヘカトンケイルを思い描くことができるからといって古代ギリシア人がそれらの存在を疑わなかったなどということはない。そして、「断片」2.2 の検討の中ですでに見たことだが、ここでもまたもや「可能」の様相が付加されることになる。例えば Tarán の訳は次の通りである。

... for the same thing can be thought and can exist.²³

そしてこれはさらに「何であれ考えられうるものは存在しうるし、逆も同じである」、「考えることのために有るものはすべて、有るために有る」といったパラフレーズにつながっていく²⁴。Barnes は近代の哲学者の中で Berkeley だけがパルメニデスの擁護者となるであろうと言っているが²⁵、これは、いわば敷衍に敷衍を重ねた結果としての主張であり、厳密なパルメニデス解釈（そして Berkeley 解釈）とはいえない。

そこでわれわれは、もう一方の、きわめて自然な読み方を採用することになる。それは、断片の報告者であるアレクサンドリアのクレメンスやプロティノスの採用したもの（もちろん、解釈は異なる）で、Zeller の提案が出てくるまでの標準的な読み方であり、すなわち、「τὸ αὐτὸν»を補語、二つの不定詞を主語、述語動詞を «ἐστίν» とするものである。ちなみに、プロティノスは次のように引用している。

「じっさい、パルメニデスは、『というのも、思考することと有ることは同じだから』と言って、「有るもの」と理性（ヌース）とを同一視し、有るものを可感的対象の中に置かなかった限りで、この種の説に早くに触れていたのだ。」（『エンネアデス』V 1.8）

このいわば「同一説」的読み方を採用する研究者は多数派というわけではない。Conche と Robbiano の訳では次のようになっている²⁶。

... Car le même est à la fois penser et être.
... in fact to understand is the same as to be.
...τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἐστίν τε καὶ εἶναι.

Vlastos はプロティノスの見解に近い方向での解釈を与えている。彼はこの断片を、「To think (sc. Being) and to be are the same thing.」と訳し、加えて、有るものを知る思惟はその存在を否定することが不可能であり、思惟が存在するなら思惟は有るものの一部であり、しかも有るものがすべて一樣である以上、思惟が有るものの部分なら、すべての有るものが、存在する思惟によって思惟されねばならない、という推論を展開する。そうしてそこから得られる結論が、「Only a Being can think Being.」となる。要するに思惟の主体と対象（有るもの）の同一性を語っているということになる。かくして、「エレア派の有るものとは心（精神）である」という驚くべき結論となる。この解釈の難点は、パルメニデスの「有るもの」が思考の主体として言及されている箇所がどこにもない点である。

変わったところでは、Ballew が、「思考する」を円環的推論（circular reasoning）とし、「有る」を spherical なものと解して、「思考する」と「有る」の形態上での同一性を読み取ろうとする解釈を施している。ただ、「思考する」も「有る」も動詞であるが、そこにそ

もそも同一性につながる類似性を、比喩を超えて実質的に見出すことは難しいと思われる。

コンテキストなしで解釈するのは難しいが、新プラトン主義的な解釈を避けつつもできるだけ了解可能な解釈を一つ提示するとしたら、次のようになるだろう。すなわち、この一文を、「思考することと、＜有る＞と思考することは、同じ一つのことである」の意で解するのである。先に確認した「断片」8.34-36a では、思考と言説が「有るもの（*εἶναι*）」をその内実とするときはじめて真なる思考と言説となるのであり、その限りで、「有るもの」が思考と言説の成立の必要条件であるということを述べているものと解釈した。ここでも、その解釈の線に沿って、パルメニデスにとって真なる「*voeiv*」とは「*εἶναι*」すなわち「有るということ」を対象として思考するものであり、その両者の本質的な関係を、「思考することと有ることとは同一である」と彼がきわめて直截的な形で述べている、と理解するのである。ただしこの解釈は、テキストの裏付けという点では、「*εἶναι*」を目的語に取る「*voeiv*」が補われなくてはならないため、残念ながら最善の解釈とは言いがたい。

Kahn も「断片」3, 8.34-36a では認識とその対象、真なる言明とそれが述べている内容の同一性が述べられており、なぜパルメニデスが両者を同定したのかという問いに対する答えは単純で、有るか有らぬかのいずれかでしかないから、というものである。知識も真なる言説も「有るものであるか有らぬものであるか」のいずれかということである。もちろん、このときの「有る」は、真であり実在的であるという意味になる。これは「*εἶναι*」の基本的な意味を真実性と見なしている限りでの解釈である²⁷。

他方、アリストテレスが『魂について』第3巻第7章（431b17）で、「一般的に言って、活動実現状態にある知性は知性認識されている事象と同一である」と述べているように、思惟は、それが有る対象を思考しているまさにそのときに、思惟が思考している対象のその存在と合致している、という事態をパルメニデスが述べているとする解釈もありうる。たしかに不可能ではないが、すでにアリストテレスの概念枠を前提とした解釈で、そのままパルメニデスに適用することには躊躇せざるをえない²⁸。

ここで、この問題に関連して、あらためて確認しておくべきことがある。それは、パルメニデスにおいて、思考と「有る」との同一性命題を考えると、例えばプロティノスのように、「*voeiv*」や「*vóos*」が直観的で無謬的な認識能力と見なされるべきではなく、つまり、それは、何か特殊な認識論的能力と解されるべきではないという点である。まずもって参考にすべきは、次の二つの断片である。

「しかしその次にわたしは、死すべき者たちが何も知らないで双頭のまま拵えあげた道からもあなたを遠ざけるから。なぜならば、彼らの胸の中で、困惑がとりとめもなく彷徨うところを導くからである。」（*αὐτὰρ ἔπειτ' ἀπὸ τῆς, ἣν δὴ βροτοὶ εἰδότες οὐδέν / πλάζονται, δίκρανοι· ἀμηχανίη γὰρ ἐν αὐτῶν / σπήθεσιν ἰθύνει πλαγκτὸν νόον*・「断片」6.4-6a)

「なぜなら、有らぬものどもが有るというこのことが駟られることはけっしてないだろうから。むしろあなたは、探究のこの道からあなたの考えを遠ざけなさい。
(οὐ γὰρ μήποτε τοῦτο δαμῆ εἶναι μὴ ἔόντα/- ἀλλὰ σὺ τῆσδ' ἀφ' ὁδοῦ διζήσιος εἶργε νόημα : 「断片」 7.1-2)

いずれも、真理の探究者に対する女神（つまりはパルメニデス）のことばである。「有る」という言説と思考をもつことが絶対的に必要なことであるとされる。われわれ死すべき者は、日常的に、「多くの経験から生まれた習慣」(ἔθος πολύπειρον : 「断片」 7.3)に基づいて臆見を形成し、本当は有らぬものを有ると見なし、逆に本当は有らぬものを有ると見なし生きている。同一律や排中律、矛盾律といった合理的思考の原則を知ったつもりであるが、たとえ思考や言説が真であっても、「有る」の本性についての理解をともなわない限りはそれらの真実性は偶然的であり、「真実らしく見える」(ἐουκότα : 「断片」 8.60) だけの思わくなのである。しかし、その「思わく」は、飼い駟らして手なづけることが容易なものではない。だからこそ、つねに、そこへと自らの思いや考えを向けることがないようにしなければならないのである。そしてその難しさがそのまま、女神からの「遠ざけよ」「語り考えよ」という勧告につながっていると言えよう。

人間の「思惟する、思考する」とは、いわば達成動詞のようにその本来の対象をすでに捉えてしまっている状態ではない。その思惟は「彷徨う」のである。von Fritz は、「νοεῖν」が形式論理学における純粹で端的な論理的演繹の過程と同じではないとし、その主要な機能は、推論的・論証的機能でなく、依然として究極の実在と直接関わることであり、論理的過程の最後だけでなく一番初めから実在と関わるものであって、なぜそうかと言えば、それは「有るもの」をともなわない「νόος」がないからである、と言っている²⁹。しかし、本当にそうだろうか。すでに引用した、言説と思考とを関連付ける諸断片に加えて、次の断片も参照せよ。

「「有る」は有る、と語りかつ考えねばならない。」
(χορὴ τὸ λέγειν τὸ νοεῖν τ' ἔδν ἔμμεναι : 「断片」 6.1)

「ここでわたしは真理に関する信頼できる言説と考えを終わりにする。」
(ἐν τῷ σοι παύω πιστὸν λόγον ἢ δὲ νόημα / ἀμφίς ἀληθείης· : 「断片」 8.50-51a)

パルメニデスが思考することだけでなく、これと合わせて言説（語ること）の重要性をくどいほどに強調し、そしてまた「断片」8において「有るもの」の諸属性を演繹的に導出するのを見ても、「νόος」がことばなどを媒介としない直観的働きを主要な機能としているとはどうしても思えない³⁰。

おわりに

死すべき者たちも、「有るもの」をゴールとしない《νόος》をもち、思考を自分たちなりに働かせている。そしてその上で、彼らに対して、「思考がそこにおいて表現を得るところの有るものがなければ、思考することを見出さないだろう」と語るということは、「思考すること」「語ること」に関して、本来的なものとしてでないもの、真なるものとしてでないものとは考えるしかないということである。言い方を変えれば、「有らぬもの」についても、少なくとも死すべき者たちに関してはこれを思考し、これを語ることはあるのである。もちろん、その場合の「有らぬもの」は、神的視座からの「有るか有らぬか」の判別の結果として「有らぬもの」とされるものであり、「思考」は彼らの日常的なそれである。

先にプラトンの『ソピステス』からの一文を引用したが、そこでは登場人物のソクラテスが、「有らぬものをそれ自体として単独に正しく口に出すことも語ることも考えることもできないのであり…」と述べていた。パルメニデスにおいては、「有らぬもの」を思考したり語ったりするときに、「正しく」とか「誤って」といった副詞は付加されない。しかし、現実には「有るもの」を内実とする思考や言説と、そうではないものを内実(?)とする思考や言説があるのである。そのことは、同時に、パルメニデスにおける厳密な認識論を見出そうとすることの困難さを示している。ありふれた「感覚 vs 知性」といった二項対立をパルメニデスの哲学詩の中に読み込めるほどには繊細な議論は、残念ながら見出せないのである。

たとえば、「断片」7で、死すべき者たちの「探究」のありようについて、「目当てをもない目と雑音に満ちた耳」が言及されている。そしてその次の行に「ロゴスによって判定せよ」という女神の命令が現れる。すると、あたかも感覚と理性とが対照的に捉えられているかに思われる。目と耳に並んで「舌」も言及されているのを見ると、ますますそう感じられるだろう。しかし、「舌」は味覚器官としてではなく、言説を語るものとして現れているのである。また、「断片」6でも、死すべき者たちが彷徨うところを抱えて困惑している状況が描かれているが、そこでも耳と目が言及されている。やはり、感覚と知性(思惟)との対立を認めたくなるだろう。しかし、ここでの目と耳は、彷徨うところと同じく、彼ら死すべき者たちの総体的な無分別を表すために登場しているのである。つまり、「耳も聞こえなければ目も見えず、呆然として、判別する力のない群衆」と女神から批判されているのである。もはや、感覚は事柄や事物の表層だけを知覚し、思惟(思考)はそれを貫いて隠れた本性を見抜くのだ、といった、対象も含めた認知能力の分類がなされているとは到底言えないのである。もちろん、プラトンへと至る途上にはたしかにある。しかし、いまだその明確な自覚がパルメニデスにあったとは言えないだろう。

(金沢大学人間社会学域人文学類教授)

追記

本稿は、令和3年度科学研究費補助金(基盤研究(C)一般:19K00104)の研究成果の一部である。

- 1 本稿ではソクラテス以前哲学者の著作断片の番号は、H. Diels & W. Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Berlin, 1951-52⁶に従う。また、パルメニデスの翻訳については、基本的に『パルメニデスにおける真理の探究』（三浦 要, 京都大学学術出版会, 2011 年）所収の訳、パルメニデス以外のソクラテス以前哲学者の翻訳については、『ソクラテス以前哲学者断片集』（内山勝利編, 岩波書店, 1996 年～1998 年, 全 5 冊+別冊）所収の訳、また、プラトンについては岩波書店版の『プラトン全集』（田中美知太郎, 藤沢令夫編）所収の訳にそれぞれ準拠したが、論旨の都合により、そしてテキストの読み方の相違により部分的に改変したところがある。
- 2 Guthrie, pp.17-19 ; Mourelatos, pp.68-70 ; Kahn, p.146, n.4 ; Verdenius, pp.10, 65 ; 三浦, pp.63-64. « νοεῖν » の中心的な機能として推論でなく無媒介的な洞察を考える Guthrie, Morelatos, Kahn は基本線において von Fritz の研究に依拠している。なお von Fritz の研究が内包する問題点については, Leshner, J. H., “Perceiving and Knowing in the *Iliad* and *Odyssey*”, *Phronesis*, 26, 1981, pp.2-24 を参照。Verdenius も問題の動詞を« knowing » と訳するのが最善であるとするが、ただし, Mourelatos などとは異なり, « νόος » がもともと非感覚的思考と感覚知覚との区別を含意するものではないし, パルメニデスもそのような区別を為してはいないので, この語が非感覚的認識とだけ関連していると誤解させることになる « insight » といった訳ではなく, 広くかつ中立的な意味としての「知る (knowing)」が訳として適切であると考えている。
- 3 Cf. Palmer (2009), p.72: “The fact that Plato also found inspiration in the Parmenidean language of νόος and δόξα might also lead one to take Parmenides’ uses of νοεῖν as strongly cognitive”.
- 4 「馴らされる」(ἀαμῆ) と訳した動詞は, 「(野性的で粗暴なものを) 飼ひ馴らす」, 「服従させる」を意味する « ἀαμάζω » の接続法受動態アオリスト形である。わかりにくい比喩的表現だが, 「有らぬものどもが有る」という主張そのものを粗野な存在と見なして, そのような矛盾した言説はどうあっても合理的で正しい言説となることはないのであるということを意味していると解したい。Cf. O’Brien, p.46; Conche, pp.116-117; Mourelatos, p.28, n. 56.
- 5 無論, 『ソピステス』ではここで対話がアポリアーに陥って終了するわけではなく, 有らぬものについての「正しい語り方」をもとめてさらに対話が続いていく。先の確認のことばにもかかわらず, エレアからの客人は, 「われわれは自衛のためにどうしても, 父なるパルメニデスの言説を吟味にかけて, 有らぬものが何らかの点で有ること, 他方逆に有るものが何らかの仕方では有らぬということを, 力ずくでも立証しなければならないことになるだろう」(241D) と予告をすることになるが, これは「[有らぬものが有るとする] 探究のこの道からあなたの考えを遠ざけなさい」というパルメニデスの勧告との対決の宣言に他ならないし, 同時に, この作業を「父親殺し」(241D) と呼ぶことによって, プラトンが, 「有らぬものが有る」という言説の絶対的な棄却をパルメニデスの主張の一つの眼目と見ていたことの証左でもある。なお, 父母に対して暴虐をはたらいた者の魂が死後にたどる過酷な運命については, プラトン『パイドン』114A-B 参照。
- 6 Palmer (1999), p.35.
- 7 Palmer (1999), p.38. ただ Palmer (2009, pp.72-73) では, “Parmenides’ actual usage, however, must outweigh any inferences one might wish to draw from either semantic analyses of the verb’s use in other

authors or from Parmenides' reception in antiquity. As some have rightly seen, certain aspects of his use of *voeiv* and its cognates suggest a more ordinary and less restrictive sense for the verb. (...) It is therefore tempting simply to translate *voeiv* as 'to think' and *voos* and *von̄ma* as 'thought' in all their occurrences, to avoid imbuing the terms with too strongly cognitive a connotation. Unfortunately, doing so would too often either strain English idiom or otherwise prove unnecessarily confusing. (...) Where necessary, therefore, we may adopt 'understand(ing)' as a proximate alternative for 'think(ing)', without, however, intending to imbue the verb *voeiv* with a strongly cognitive sense."と述べて、折衷的な結論に至っている。

- 8 von Fritz の研究が内包する問題点については、Leshner を参照。例えば、ホメロスの『イーリアス』の「[物音がして、てっきり自分を呼び戻しに戦友が来たものと思っていたが] ドロンは、間合いが槍の届くほど、あるいはそれよりも短くなったとき、敵だと気付いた (γνώ)」(Il. 10.358) という箇所と、「今、駿足アキレウスの二頭の馬が、御者を乗せて戦場に現れたのが見えた (ἐνόησα)」(Il. 17.486) という箇所を比較せよ。Cf. Leshner, p.9.

- 9 Schwyzer-Debrunner, pp. 358, 364; Chantraine, pp. 300-301.

- 10 エンペドクレスの例では、不定詞は文の主語の補足的説明(補語)ではない。したがって、あとで見られるような受動態への言い換えはできない。

- 11 Mourelatos, p.55, n.26. 「思考するための(思考すべき)道」というように、不定詞を「道」の補足的説明と解する場合は、「思考される道」と受動的に言い換えられることになる。

- 12 Robbiano, p.90. なお、彼女はパルメニデスの曖昧さを積極的に評価するという立場から、不定詞(「理解する」)の対象が道であると同時に、「理解すること」自体が探究の目標を意味するという折衷的な態度を取る(pp.81-82, 90-9)。また、Palmer (2009, p.71)は、「understanding」だけでは過程を含意して達成動詞として機能しないからという理由から、「νοῖσθαι」を「(achieving) understanding」と訳出している。

- 13 三浦, p.34.

- 14 O'Brien, p.154.

- 15 可能の様相を導入するのが、Bumet, p.173; Cornford, p.98; Guthrie, p.13; KRS, 245; Coxon, p.174; O'Brien, p.16; Tarán, p.32 など。

- 16 三浦, pp.64-71.

- 17 Gallop, p.57.

- 18 Schwyzer-Debrunner, pp. 358; Chantraine, pp. 300-301.

- 19 Cf. Chantraine, p.301. Chantraine は述語動詞が *εἶναι* の場合のホメロスでの事例として、「εἰσι καὶ οἷδε τὰδ' εἰπόμεν」(Il. 9.688: 「これらの者たちもまたそのことを言うためにいる」), «χειρεὺς ἀμύνειν εἰσι καὶ ἡμῖν」(Il. 13.814: 「われわれにも、防ぐために腕がある」)を挙げている。Cf. DK; Kahn, p.146 n.4; Barnes, p.157; Curd, p.24; Gallop, p.55; Palmer (2009), p.83; Cassin, p.77; Graham, p.212.

- 20 この点については三浦, p.65 参照。

- 21 Cf. O'Brien, p.19; KRS, p.246 など。

- 22 Schwyzer-Debrunner, p.364.
- 23 Tarán, p.41. 同様の訳をとる研究者は少なくない。Cf. Gallop, p.57.
- 24 Furley, p.11 ; Gallop, p.8 ; Barnes, p.165.
- 25 Barnes, pp.170-171.
- 26 Conche, p.87 ; Robbiano, p.58. Tarán は “For to think and to be is one and the same thing.” が逐語訳に基づく最も自然な解釈であると言いつつも、存在と思考の同一性に難点を見出している。
- 27 Kahn, pp.163-164.
- 28 Aubenque, Tome II: “Syntaxe et Sémantique de l’Être”, pp.115-117. なおアリストテレスからの引用は岩波版全集所収の中畑訳。
- 29 von Fritz, p.52: “... there is no *noos* without the *eon*, in which it unfolds itself”.
- 30 Cf. Robbiano, p.128. Mourelatos, pp.68-70 ; Kahn, p.146, n.4 ; Verdenius, pp.10, 65 ; 三浦, pp.63-64.
- « νοεῖν » の中心的な機能として推論でなく無媒介的な洞察を考える Guthrie, Morelato, Kahn は基本線において von Fritz の研究に依拠している。Verdenius も問題の動詞を « knowing » と訳すのが最善であるとするが、ただし、Mourelatos などとは異なり、「*νόος*」がもともと非感覚的思考と感覚知覚との区別を含意するものではないし、パルメニデスもそのような区別を為してはいないので、この語が非感覚的認識とだけ関連していると誤解させることになる « insight » といった訳ではなく、広くかつ中立的な意味としての「知る (knowing)」が訳として適切であると考えている。

参考文献

- Aubenque, P. (sous la dir.), *Études sur Parménide*. Tome I : Le Poème de Parménide. Texte, traduction, essai critique; Tome II : Problèmes d'Interprétation, Paris, 1987.
- Barnes, J., *The Presocratic Philosophers* (rev. ed.), London, 1982.
- Ballem, L., “Straight and circular in Parmenides and the ‘Timaeus’”, *Phronesis*, 19, 1974, pp.189-209.
- Burnet, J., *Early Greek Philosophy*, London, 1930⁴.
- Cornford, F. M., “Parmenides’ Two Ways”, *Classical Quarterly*, 27, 1933, pp.97-111.
- Chantraine, P., *Grammaire Homérique*, Tome II : Syntaxe, Paris, 1953.
- Conche, M., *Parménide. Le Poème: Fragments*, Paris, 1996.
- Curd, P., *The Legacy of Parmenides. Eleatic Monism and Later Presocratic Thought*, Princeton, 1998.
- Diels, H. & Kranz, W. [DK] , *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Berlin, 1951-52⁶.
- Furley, D. J., “Notes on Parmenides”, *Phronesis*. Supp. 1 : *Exegesis and Argument*, eds. E. N. Lee, A. P. D. Mourelatos, R. M. Rorty, Assen, 1973, pp.1-15.
- Gallop, D., *Parmenides of Elea. Fragments. A Text and Translation with an Introduction*, Toronto, 1987.
- Graham, D. W., *The Texts of Early Greek Philosophy. The Complete Fragments and Selected Testimonies of the Major Presocratics*, Part I, Cambridge, 2010.
- Guthrie, W. K. C., *A History of Greek Philosophy*, Vol.II, Cambridge, 1965.

- Kirk, J. S., Raven, J. E. and Schofield, M. [KRS], *The Presocratic Philosophers*, 2nd ed., Cambridge, 1983 (邦訳 : G・S・カーク, J・E・レイヴン, M・スコフィールド, 『ソクラテス以前の哲学者たち (第2版)』 (内山勝利, 木原志乃, 國方栄二, 三浦 要, 丸橋 裕訳) 京都大学学術出版会, 2006 年) .
- Kahn, Ch. H., "The Thesis of Parmenides," in his *Essays on Being*, Oxford, 2009 (orig. in *The Review of Metaphysics*, 22, 1969, pp.700-724).
- Long, A. A. (ed.), *The Cambridge Companion to Early Greek Philosophy*, Cambridge, 1999.
- Leshner, J. H., "Perceiving and Knowing in the *Iliad* and *Odyssey*", *Phronesis*, 26, 1981, pp.2-24
- Mourelatos, A. P. D., *The Route of Parmenides. A Study of Word, Image, and Argument in the Fragments*, New Haven and London, 1970.
- O'Brien, D., *Études sur Parménide* (sous la dir. P. Aubenque), Tome I : Le Poème de Parménide. Texte, traduction, essai critique, Paris, 1987.
- Palmer, J. A., *Plato's Reception of Parmenides*, Oxford, 1999.
- , *Parmenides and Presocratic Philosophy*, Oxford, 2009.
- Robbiano, Ch., *Becoming Being. On Parmenides' Transformative Philosophy*, Sank Augustin, 2006.
- Schwyzer, E., Debrunner, A., *Griechische Grammatik*, Bd II: Syntax und syntaktische Stilistik, München, Fünfte, unveränd. Aufl., 1988.
- Tarán, L., *Parmenides. A Text with Translation, Commentary, and Critical Essays*, Princeton, 1965.
- Verdenius, W. J., *Parmenides. Some Comments on His Poem*, Amsterdam, 1964.
- Vlastos, G., "Parmenides' Theory of Knowledge", *Transactions of the American Philological Association*, 77, 1946, pp.66-77.
- von Fritz, K., "NOUS, NOEIN, and Their Derivatives in Pre-Socratic Philosophy (Excluding Anaxagoras)", in Mourelatos, A. P. D. (ed), *The Pre-Socratics. A Collection of Critical Essays*, Princeton, 1993 (orig. in *Classical Philology*, 40, 1945, pp.223-242 ; 41, 1946, pp.12-34).
- 内山勝利編, 『ソクラテス以前哲学者断片集』第I分冊, 岩波書店, 1996 年.
- 三浦 要, 『パルメニデスにおける真理の探究』, 京都大学学術出版会, 2011 年.